

ふたりカオス

脚本・松本陽一

目次

「ウエディングプラン」

「惑星エリス」

「嘘つきのハンバーグステーキ」

「指名の順番」

「ラストゴング」

and

「ふたりで開けた扉」

登場人物

「ウエディングプラン」

木乃下つぐみ・・・ウエディングプランナー。

峰岸愛子・・・カフェの店員。つぐみのルームシェア相手。

「惑星エリス」

坂宮祐次・・・エリートビジネスマン。ユキオの大学の先輩。

小柳ユキオ・・・就職浪人中の男。大学院では宇宙物理学を専攻していた。

「嘘つきのハンバーグステーキ」

田所・・・キャバクラの客引き。

地蔵さん・・・名無しのホームレス。虚言癖がある。

「指名の順番」

吉村孝好・・・風俗店にやってきた高校教師。

恵組多良・・・風俗店にやってきたサラリーマン。

「ラストゴング」

伊草・・・女子ボクシングの選手。

千里・・・シャンソン歌手。伊草の姉。

「ウエディングプラン」

シャワーをひねる音。変なシャワー音。

愛子の声 「あれ?」

木之下つぐみが部屋に戻ってくる。

峰岸愛子が壊れたシャワーと格闘する声（関西弁）がちよいちよい聞こえるがつぐみは意に介さず、仕事用のパンコンを開き仕事を始める。しらいらしているようだ。

しばらくしてシャワー音が止まる。シャワー室から愛子が出てくる。

愛子

「妙な高揚感、早口で）あかんでこれもう、もうめっちゃ変な角度でな、スーパーって、普通シャワーの横のところから水吹き出す思わへんから、いや普通の出口からも出てんねん、圧は弱いけどジャーて出てんねん、普通の出口から、あの、普通のほうね、穴が10個、いや20個くらいある、その普通のほう、えく何ちゅうたらええの」

つぐみ

「そっけなく）分かる」

愛子

「で、その普通のほうから出てるて思ってたとこに横の部分、なんちゅうたらええの、ええと、普通の部分の横の部分っていうか」

つぐみ

「分かんない」

愛子

「普通の部分がここやったら、この辺、この辺のボルトが一個二個しまってるあたりからな、ボルトやないわ、ボルトなんかついてへんけどなんか接合されてる部分、部品と部品との境目みたいなところからな、じわじわちゃうわ、ビシューって、あれや温泉が湧き出た瞬間みたいな、いやその瞬間見たことないけどだいたいイメージ湧く？湧かん？まあええわ、それくらい勢いでな、横からビシューっと突然吹き出すねん、なあどうしたらええと思っ？あれか、タウンページ探して、あ、おかえり」

つぐみ

「そのタイミング?」

愛子

「え、何が?」

つぐみ

「おかえり」

愛子

「ああ、おかえり。今ちゃんと言ったよ」

つぐみ

「・・・」

愛子

「ただいま無しかい。な、どうしたらええと思っ？業者来てくれるかなこの時間から」

つぐみ

「ごめん。ちょっと（勘弁）」

愛子

「ん?」

つぐみ

「ちょっと（疲れてるから）」

愛子

「ああ、うん、あれやな、仕事とかが大変なんやな」

つぐみ

「ありがと」

愛子

「でな、そのシャワーが壊れた理由がな」

つぐみ

「何?」

愛子 「え」
つぐみ 「ちよ、ごめんて」
愛子 「ああ、シーヤな。すっごい出てんもんな、負のオーラ」
つぐみ 「うっさうよ」

つぐみはパソコンをカタカタ。スナック菓子を食べながらしばらく遠巻きに眺める愛子。

愛子 「どなごごよ」
つぐみ 「何が」
愛子 「こんなん経験ないから」
つぐみ 「いや、シャワーくらい少々水漏れしてたって」
愛子 「やのうて」
つぐみ 「え」
愛子 「どうやって励ましたらええんやろ」
つぐみ 「誰を」
愛子 「あなた」
つぐみ 「・・・」
愛子 「ごうごう時ごうごう距離感で同居人の悩みを聞いてあげたらええんやろ。な、ごうごうの
つごめつちや繊細とちやうん。ネットで調べてみよか」
つぐみ 「すでに繊細じゃないからそのアプローチ」
愛子 「な、今の正解？」
つぐみ 「は〜」
愛子 「ごうごうストレートかつ若干コミカルな感じでさりげなく核心に触れる感じ」
つぐみ 「ほおっておいてくださいー！」
愛子 「きた、拒絶しながらもかまって欲しいオーラ」
つぐみ 「うおおおおー！」
愛子 「お、どした、来た？何か来た？」
つぐみ 「あくやすまらない、気持ちかやすまらない、もう何もかもを投げ出すか爆発させるか刺し殺す
かしたら」
愛子 「あかんで、最後のあかんよ」
つぐみ 「あく何なんだルームシェア、何でドラマで見た感じのいい感じの距離感にならないんだ、何な
んだこのぶっつけよつのないイライラ感は」
愛子 「部屋が分かれてへんからね」
つぐみ 「それだつ、もうそれだけ問題は。プライベートが欲しい欲しい欲しい欲しい欲しい」
愛子 「病んでらっしやるなつぐみはん。しゃあないやん。金やで世の中」
つぐみ 「あああ、金金金金」
愛子 「しゃあないて稼ぎ少ないんやから。主にあなたが」
つぐみ 「はべっ、ごほが・・・(急にもごご)」

愛子 「うちが5万、あんた二〜ゴ〜やで。家賃出してんの。これ事実。カフェでバイトしてるうちの
ほつが収入が安定してる。これも事実」

つぐみ 「もごもご（しょうがないじゃん。仕事が（もごもご）」

愛子 「あ、こないだおもしろいサイト見つけたで。あんたの派遣元の会社、ランキング出してんねんな。
（とつぐみのパン「ンをいじめる）」

つぐみ 「あ、ちよ、やめろ」

愛子 「ウェディングプランナー満足度ランキング。めっちゃシビリアな企画やん。おもしろいけど」

つぐみ 「やめろ、知ってるそれ」

愛子 「ええと、木之下つぐみ」

つぐみ 「やめろ」

愛子 「チャームポイント、何でウェディングプランナーにチャームポイントやねん、笑顔、え、それ
だけ、まあええわ、の木之下つぐみさんのランキングは、全国3000人中」

つぐみ 「……」

愛子 「……ごめんな」

つぐみ 「……いいよ（微笑）」

愛子 「こないだ見た時1000位くらいやったから上がってるかな思て」

つぐみ 「最下位間近、か、は〜（深いため息）」

愛子 「深いな〜、ほなおやすみ」

つぐみ 「え、ここで終わり?」

愛子 「何が?」

つぐみ 「私の悩みをあぶり出すだけあぶり出しておやすみ?このタイミングで?」

愛子 「ほ〜」

つぐみ 「何」

愛子 「やっぱ聞いて欲しいんやん」

つぐみ 「う〜聞いて欲しいなんて思ってない。でも聞いて欲しくないかって言われたら分かんない。そ
ういう複雑さってあるでしょ。人は」

愛子 「シンプルに行こうぜ」

つぐみ 「クライアアントの旦那がむかつく」

愛子 「それで?」

つぐみ 「旦那が全然話し聞かない。打ち合わせ中ずっとスマホいじってる。しかも仕事とかじゃなくて
動画みてる。で、嫁はそれを放ってる」

愛子 「じゃあええやんそれで」

つぐみ 「でもプランや見積もりにはノーっていつ」

愛子 「ここって時に出てくるんやな」

つぐみ 「で、嫁もそれに従う。だからじえんじえんプランが前に進まない」

愛子 「何でノー言つの?」

つぐみ 「わかんない。わかんないから困ってる。全体的なイメージが合わないとか、会場は洋風がいいっていったかと思っただら料理は中華とか」

愛子 「矛盾してんねや」

つぐみ 「そ、矛盾だらけ。チャペルがいいって嫁が言ったのに会場はチャペルがないホテルがいいとか、でもそのホテルには「コンドラがないのに「コンドラで登場したいとか、コンドラはやりたいていうから派手な演出がいいのかな」と思ったたらキャンドルサービスは絶対嫌だとか、」

愛子 「何やそれ、めっちゃめっちゃや」

つぐみ 「で会場のパンフレット見せたら、控室の写真の隅っこ指さして、この段差につまずいたら危険だとか重箱の隅つつくよつなごと言いだして、じゃあこれもつぎつぎろっつー」

愛子 「ええかつぐみは？」

つぐみ 「何」

愛子 「ここでもいっちょクイズを出すで」

つぐみ 「何でかわかんないけど答えるよ」

愛子 「このスナック菓子はハッピーターンという名前ですが、ハッピーの意味は幸せ、では、ターンの意味は？」

つぐみ 「・・・うつうつおおおおー」

愛子 「何で爆発するの？」

つぐみ 「今、それが、なんか、意味、あんの？何このはぐらかし」

愛子 「はぐらかしてへんよ。幸せの意味は奥深いっちゅーことだね」

つぐみ 「ハッピーターン（とネット検索）」

愛子 「味気ないてアプローチが。考えてもらって」

つぐみ 「（雑に）ハッピーターンでしょー！幸せが行って来いー！」

愛子 「そんな訳ないやろ」

つぐみ 「それ以外に何があんねんやー！」

愛子 「来た、東京人が興奮した流れで出す関西人がめっちゃむかつくエセ関西弁」

つぐみ 「そりやすんまへん」

愛子 「あ、ホンマはそんなにむかついてへんよみんな。若干優越感にひたんねん。はは、あいつら関西弁使ってるでな」

つぐみ 「おおきに」

愛子 「それはむかつく」

つぐみ 「基準はどこやねんー！」

愛子 「今のはまあ、よしよしとこ」

つぐみ 「で、答えは？」

愛子 「何の？」

つぐみ 「ハッピーターン。(パソコン見て) あ、やっぱ正解じゃん。亀田製菓ホームページ、ハッピーターンとは幸せが戻ってくるように願いを込めてつくられたお菓子」

愛子 「あ、正解なんや」

つぐみ 「知らないんじゃない」

愛子 「いやな、うちが言いたかったことはな」
つぐみ 「もういい、私ももう寝る」

愛子 「その旦那も、クイズ出してるってこと」
つぐみ 「え？何それ」

愛子 「だって結婚式のプランなんて究極3つ4つくらいの選択肢から選んで進んでいくだけやろ」
つぐみ 「まあね、チャペルか神社か式はなしか、白無垢かドレスか、ドレスだったら白かピンクか青か、登場の音楽はタイタニックかキャンユーセレブレートかふたりで行ったコンサートのいきものがかりか、究極そういうことよ、さくさく選んでいけばいいのよ」

愛子 「じゃあ何で旦那はグズるん？」
つぐみ 「知らないよ、だから悩んでんじゃない」

愛子 「あんたに恨みでもあるとか？もつとあんたのランクを落としたいとか」
つぐみ 「そうなの？」

愛子 「アホか。んな訳ないやろ」
つぐみ 「そうとしか思えん」

愛子 「問題はそこや。ぴったりのプランを考える前に、なんで旦那はグズるのかを考えんと」
つぐみ 「実は結婚したくない」

愛子 「あるな、ありそうな線やで」
つぐみ 「嫁に隠してる謎がある」

愛子 「隠されたメッセージやな。嫁にばれんようあんたに伝えたい」
つぐみ 「例えば？」

愛子 「考えろ。私はカフェの店員だぞ。何も出てこんぞ」
つぐみ 「実はツラだった」

愛子 「ほう、それがどのあたりに隠されてた？」
つぐみ 「中華を希望した」

愛子 「油っぽいのが好き」
つぐみ 「そう！」

愛子 「おい2867位、それがお前の本気か？」
つぐみ 「くそー、ええと、人前式で会場は和風で、料理は中華で、登場BGMは」

愛子 「違う違う、あんた森を見てへんよ、木いばっか見てたらあかんよ」
つぐみ 「ごめん、カフェの店員」

愛子 「プランの中身ちゃうねん、そんなところっころ変わりよるんやろ。そっやのうて」
つぐみ 「のうて」

愛子 「旦那の態度とか、視線とか、そういうの観察せな」
つぐみ 「態度か。でもずっとスマホいじってるだけだったし」

愛子 「その間旦那はどんな表情やった？スマホに夢中？それとも適当？」
つぐみ 「分かんないよ。こっちはもう無視して嫁と話しこんでたし」

愛子 「旦那は動画見てたんやろ？どんなん見てた？」
つぐみ 「知らないよ。絶対関係ないでしょ旦那が見てた動画とか。でも結構熱心に見てたよな」

愛子 「きたで、きたきた、何でウエディングプラン中に熱心に動画見てんねん。おかしいこれ」
つぐみ 「あ」
愛子 「何や」
つぐみ 「一度だけね、嫁が注意した」
愛子 「何て」
つぐみ 「マー君、」
愛子 「旦那マー君な。それで？」
つぐみ 「マー君、そんな謎、世界中の人が解けないんだからそれくらいにしたら？って」
愛子 「え」
つぐみ 「言った。確か」
愛子 「え、え、え、何て？もっかい」
つぐみ 「だから、そんな謎解けないんだからそれくらいにしたら」
愛子 「何それ、めっちゃ気になるやん」
つぐみ 「いや別にただのクイズ番組とかの動画とかでしょ、今流行りの謎解き系とか」
愛子 「でも世界中の人が解けないって言ったんやろ」
つぐみ 「ああ、言ってたね」
愛子 「ちょ検索してみよ」
つぐみ 「何て？番組名とか知らないし、動画見たわけじゃないし」
愛子 「そうやな、じゃあ、謎の動画、とかで検索してみよか」
つぐみ 「謎の動画（と打ち込む）、出たよ」
愛子 「うわ、UFOばかりや」
つぐみ 「でしょ？あとは・・・（とスクロール）心霊、心霊、心霊、怖、もういや」
愛子 「ん、ちょっと待った」
つぐみ 「え」
愛子 「何これ」
つぐみ 「どれ」
愛子 「けっこうな人が見てるよ、アクセス数いちじゅうひゃく、はく七〇〇〇万ヒットやて」
つぐみ 「世界中の人が見てる・・・」
愛子 「そう、これやで絶対。ええと、タイトルは・・・黄色いハンマーを持った女と花瓶を頭に乗せ
た男」
つぐみ 「何それ」

つづく

「惑星エリス」

喫茶店に入ってくるスーツ姿の坂宮祐次。

坂宮 「(店員に) ええと、ふたり。吸わない。あ、もう来てるかも知れないから自分で探すわ」

祐次、見渡ししながら店内へ。テーブルへ座る。

坂宮 「(店員へ) ホット」

祐次、時計を見る。

坂宮 「先に来ちゃまずいか。ま、それも社会勉強ってことで」

経済誌を取り出し眺める祐次。小柳ユキオがやってくる。

ユキオ 「(店員に) あ、ふたり。ええと、吸わないです。あ、ちょっと待ってください。もうひとりの人が吸うか吸わないかが分からなくて。あれ、どうしよ、ええと、」

坂宮 「小柳君？」

ユキオ 「え、(店員に) あ、大丈夫です」

ユキオ、坂宮の元へ。

ユキオ 「あの〜」

坂宮 「坂宮です」

ユキオ 「あ、よかった、あの、はじめまして、」

坂宮 「とりあえず座って。コーヒーでいいい？(店員に) すみません、ホットもうひとつ、」

ユキオ 「(店員に) あ、アイスマイルクをお願いします」

坂宮 「ああ、そう、いやごめんね、先についてちゃって、」

ユキオ 「あの僕、小柳ユキオって言います。ええと、ええと、自己紹介ですよ、あはは、こういうの苦手、」

坂宮 「いいよ、だいたい山根さんから聞いてるから。山根さんとはね、もう僕が入社した時からだから7年くらいのおつきあいをさせてもらってる。社会のいろはを教えてくれたのも山根さんだから今日、」

ユキオ 「(店員) あのすみません、アイスマイルクやめてアイスカフェオレにしてもいいですか」

坂宮 「・・・」

ユキオ 「あ、すみませぬ」

坂宮 「ま、その山根さんがね、君をどうしても就職させたいってことで、」

ユキオ 「あの、すみませへ」

坂宮 「はっ」

ユキオ 「山根さんって誰ですか」

坂宮 「え、いやだから、今日君と僕をセッティングした、」

ユキオ 「あ、あくはいはい、あ、ごめんなさい、あの山根さん、」

坂宮 「大学のOBだろ、君と僕の」

ユキオ 「あ、そうでした、すみません、(独り言っぽく) ちょっとこんがらがっちゃった」

坂宮 「で、君と同じ理系学科卒の僕に白羽の矢が立ったって訳。初めまして。坂宮です」

ユキオ 「あ、小柳です。今日はよろしくお願いします」

坂宮 「じゃあ早速始めようか。まず服装はそんなラフな格好じゃ駄目だな、スーツがいい。それから絶対先輩よりも先に待ち合わせ場所にきて席を確保しておく。これOB訪問の基本」

ユキオ 「えっ」

坂宮 「(笑って) って山根さんに教わったんだ、俺も。覚えておくといいよ。僕は気にしないけど今後まだOB訪問を続けるなら、」

ユキオ 「(独り言っぽく) めんどくさいんだなあ」

坂宮 「・・・聞こえてるや」

ユキオ 「えっ」

坂宮 「まあ、いいだろう。僕もあんまり時間がないんでね、何が聞きたい？」

ユキオ 「あ、はい、じゃあよろしくお願いします」

坂宮 「お願いします」

ユキオ、ポケットからごそごそとメモ紙を取り出す。

ユキオ 「ええとではまず、(メモ紙を見て)先輩が今の会社に」

坂宮 「(笑)あのね小柳君、これも言っておくね。こういう質問事項もちゃんと覚えてくること。これも基本だよ」

ユキオ 「え、そうなんですか、でも僕バカだから、あと緊張しいで」

坂宮 「分かった、いいよ(笑)、続けて」

ユキオ 「はい、(メモ紙を見て)先輩が今の会社に入った理由を教えてください。(棒読み)」

坂宮 「そっだなあ、僕はね、大学でもわりとパソコンをいじるのが好きだったから、機械系のメーカーよりは、ITのほうの興味が強かったね、ちょうどそういう時代で求人も多かったし、だから、」

ユキオ 「(メモ紙を見ている)」

坂宮 「・・・今の部署はエンジニアじゃなくネットワーク関連の人事統括だけど、将来がありそうな会社だったから」

ユキオ 「(メモ紙を見ている)」

坂宮 「終わったよ」

ユキオ 「あ、はい、では次の質問です。(棒読み) 理系出身の学生が面接などで気をつけることは何ですか」

坂宮 「これよく聞かれるし、大事だと思う。ずばり面接官は理系のやつらは「ミニマクション能力に問題があるとはなから決めてかかっているよ」ところがある。ま、実際そついう奴も多いしね、だから・・・」

ユキオ 「メモ紙を見てぶつぶつ言ってる」

坂宮 「小柳君」

ユキオ 「あ、はら」

坂宮 「まさに今のこの状況だよ」

ユキオ 「え、どついう」

坂宮 「今自分がどんな風に見られてるか分からない？」

ユキオ 「どんな風に？」

坂宮 「大事だよ、ここがもし面接会場だったとしたら、自分が今どう見られているか」

ユキオ 「ええと、わかりません」

坂宮 「じゃ駄目なんだ。自分を客観視しないと。ほら、物理の授業で言われたことない？物事に対してフカン視することも大事だとか」

ユキオ 「宇宙から見た地球ですか」

坂宮 「う、うん、まあそついうことだね」

ユキオ 「それすごいよく分かります。たいていの論文や学者は地球からの距離で惑星の価値を決めるんです。何故ならそれが自分達の価値観だから。けど、それっておかしいなって前から思っています、だって、」

坂宮 「ちよつと待って、これ何の話？」

ユキオ 「え、研究対象となる惑星からの視点について」

坂宮 「ええとね、(笑)分かった。じゃあこつしようか。今日はもう雑談にしよう。とりとめない話をしながら僕は社会のこと、仕事のことを話す。君はそこから必要な情報があればチョイスして帰ればいい。どつうだい？」

ユキオ 「え、でも時間ないんじゃない？」

坂宮 「急がば回れ。社会に出たら大事だよこついう時間も。そのメモ紙はしまつて」

ユキオ 「分かりました」

沈黙。

坂宮 「(小声で) これも駄目か」

ユキオ 「え？」

坂宮 「いいんだよ、雑談なんだから自由なこと喋つて」

ユキオ 「あ、でも、思いつかないし」

坂宮 「ほら、さっきの惑星からの視点の話とか」

ユキオ 「あ、大丈夫です。自分の中で解決したんで」

坂宮 「いやそつじやなくて」

ユキオ 「主体となる研究惑星からの視点だけでも逆にそれは一方的な価値観でしかないし、だから双方向からの視点でとらえていかないと、」

坂宮 「君さ、もしかして、宇宙物理学？」

ユキオ 「あ、そつです」

坂宮 「あの〜何ていったかな、名物教授がいた」

ユキオ 「鴨下教授ですか」

坂宮 「あ、そつそつ、生きた化石って言われてた」

ユキオ 「あ、先輩も知ってるんですね、あくなんか嬉し」

坂宮 「少しだけゼミに通ってた時期があつてね、そうか宇宙物理か、それで」

ユキオ 「すみません、何か変な話しちゃって」

坂宮 「厳しいって聞くよ、みんな当然JAXA（ジャクサ）に行きたいけど、狭き門だからね」

ユキオ 「僕はあまりJAXAに期待してません。やっぱり見方が一方的っていうか、宇宙に行く理由付けがまったく論理的になつてない行き当たりばつたりのアホ集団っていうか」

坂宮 「そうなんだ。まあ打ち上げ失敗したとかつて話はよく聞くけど」

ユキオ 「僕はインドに注目しています。経済的な状況から中国の宇宙開発のほうが目が集まっているみたいですけど、NASAとの差別化やオリジナリティ、ロシアや中国との位置関係などの地学的条件、それからこれまでの実績ですね、おそらく今後普遍的に宇宙でリーダーシップを取つていくインドだよ、」

坂宮 「じゃあや、」

ユキオ 「え」

坂宮 「何で普通に就職しようと思つてるの」

ユキオ 「え、だつて」

坂宮 「そこまでしっかりしてるんなら、多少回り道したつて宇宙事業に携わる仕事についたほうが君にとつては、」

ユキオ 「そんなの無理でしょ」

坂宮 「え」

ユキオ 「無理に決まつてるじゃないですか。何言つてるんですか坂宮さん」

坂宮 「いや、そんなのやつてみないと分からないじゃないか、たとえば普通に就職したとしても、働きながら勉強を続けるとか、」

ユキオ 「じゃあ何で坂宮さんは今の仕事してるんですか」

坂宮 「え」

ユキオ 「だつて物理学科の卒業生がー丁の人事部っておかしいでしょ。エンジニアならともかく、物理と何の関係もないし、」

坂宮 「いやでも大抵の卒業生はそつだよ、といつより社会に出たらもう一度いろいろ勉強し直さないといけないんだ」

ユキオ 「ですよ、ね、じゃあ意味ないじゃないですか」

坂宮 「え」

ユキオ 「宇宙物理学は僕の中でちゃんと完結してますから。社会に出て使う気もないし、使えるとも思っていないし。聞いた話ですけど、物理習った奴はニュートン力学だけ分かってればそこそこ使えるって、どっかの大企業の社長が言ってたらしいですよ。そんなの初歩の初歩なのに」

坂宮 「小柳君ね・・・ええとじゃあ、君はつまり、就職なんて妥協でしかない」と

ユキオ 「そうは言ってませんけど」

坂宮 「言ってるじゃないか。今君の目の前に座っている男は、先輩面して夢や希望を語ってるけど、実際は妥協して社会の歯車になったらくでもない男だって。だからそんな男の話なんて聞きたくないって、そう思ってるんだろ」

ユキオ 「あれ、何かおかしい感じが」

坂宮 「正直に言うよ、社会に出て宇宙物理学は何の役にも立たない。惑星からの距離、太陽系の惑星の数、何の役にも立たないよ。せいぜいガード下の飲み屋で話題にして盛り上がる程度だ。それもまた価値があるかも知れないけどね、だから僕は言ったじゃないか、自分の目指す道に進んだほうがいいって。それが出来ないなら大人しく社会の歯車になれよ。君は就職試験に落ち続けてるんだろ。社会の歯車にすらなれない男が偉そうなこと言っんじゃないよ」

沈黙。

ユキオ 「・・・分かりました。どうもすみませんでした」

坂宮 「僕も、大人気なかったよ。でも今日はOB面接って話だったから、」

ユキオ 「坂宮さん」

坂宮 「何」

ユキオ 「じゃあごうじませんか。今から僕が宇宙物理学の問題を出しますから、それを解いてください」

坂宮 「は？」

ユキオ 「これ、僕も解けない謎なんです。もしこれ、坂宮さんが解いたら、僕坂宮さん尊敬します。尊敬して、社会の歯車になってみよつと思えます」

坂宮 「お前な、いい加減に、」

ユキオ 「ごうじですか？」

坂宮 「そもそも論理が矛盾してる。俺にはその謎を解く動機がない。僕は君の人生になんかまったく興味がないからだ」

ユキオ 「解けたら、今までのこと、謝ります。で、ちゃんと坂宮さんの言った通りにして面接を受けてみよつと思えます」

坂宮 「もう今日は終わりだ。何度でも言っが君の将来は今の僕にはどうでもいい。山根さんには僕のほつから謝っておくから心配しないで」

ユキオ 「それって自分を否定してませんか？」

坂宮 「え」

ユキオ 「自分は物理学なんてごぶに捨てて、社会の歯車になった男だって言ってますか。本心ですかそれ」

坂宮 「・・・」

ユキオ 「僕は、社会に出た人が今でも物理学の才能があつて、それなのに社会の歯車になつてゐるって安心したいんです。それってちよつとかっこいいでしょ」

坂宮 「……かっこいいと悪いとかつて話じゃなく」「そうですねか？」

坂宮 「……分かった。出してみろよ。これでも成績はトップクラスだったんだ。そんじよそこらの数式なら今でも解けると思つよ」

ユキオ 「じゃあ問題です」
坂宮 「どうぞ」

ユキオ 「太陽系の惑星の数は？」
坂宮 「は？」

ユキオ 「答えてください」

坂宮 「お前やっぱりからかつてゐるのか。水金地火木土天海冥だから、答えは9……いや、冥王星は準惑星に降格になつたな確か、じゃあ8だ」

ユキオ 「不正解です」

坂宮 「何で」

ユキオ 「もつひとつあるんです。惑星が」

坂宮 「もつひとつ？」

ユキオ 「ええ」

坂宮 「ちよつと待てよ、学生のころに何かの雑誌で読んだぞ、第10の惑星発見か、つて」

ユキオ 「そうですね、惑星、エリスです」

坂宮 「エリス？」

ユキオ 「ポイントはこのエリスが惑星であるという証明です。その証明が僕としてはまだなされてないと思つてゐる。それをあなたにやつてもういい」

坂宮 「は？そんなの俺に出来る訳が」

ユキオ 「じゃあヒントあげましょう。これ見てください（と携帯を取り出す）」

坂宮 「え」

ユキオ 「これにエリスが惑星かどうかのヒントが隠されています」

坂宮 「（携帯を見て）これは、何だ？」

ユキオ 「全世界で閲覧されている動画です。再生しますよ」

坂宮 「黄色いハンマーを持った女と花瓶を頭に乘せた男……」

くひく